

聞いたこともない
シルクロード物語

小椋 佳

切り絵 宮田雅之



聞いたこともない シルクロード物語

小椋 佳

切り絵 宮田雅之



昭和二十二年四月三日
ロマン子良内蔵蔵
バルガモントルコ

聞いたこともないシルクロード物語

物語を始める前に

シルクロードを題材にして作り話を書いてみようと思いついてから、もう一年が過ぎています。一昨年秋、機会があつてマルコ・ポーロの足跡を旅することがありました。ヴェネチアから始まって、イスタンブール、カブルと駆け足の旅行でしたが、自分にとって一番興味のあつた現地の唄を聞かされた時に、日本に古くからある唄のいくつかのメロディーと似たものを感じました。似ているというのは誤った表現かもしれませんが。最近でこそ西洋から這入ってくる唄を外来のと言い、日本古来の唄と対比して考えていますが、もともと日本古来の唄が外国の影響を全く受けずに生まれたものと考えるのが誤りです。

考えてみれば、昔から日本は外国のものを食欲に取り入れながら変化して来たのです。中央アジアの唄のメロディーが、昔



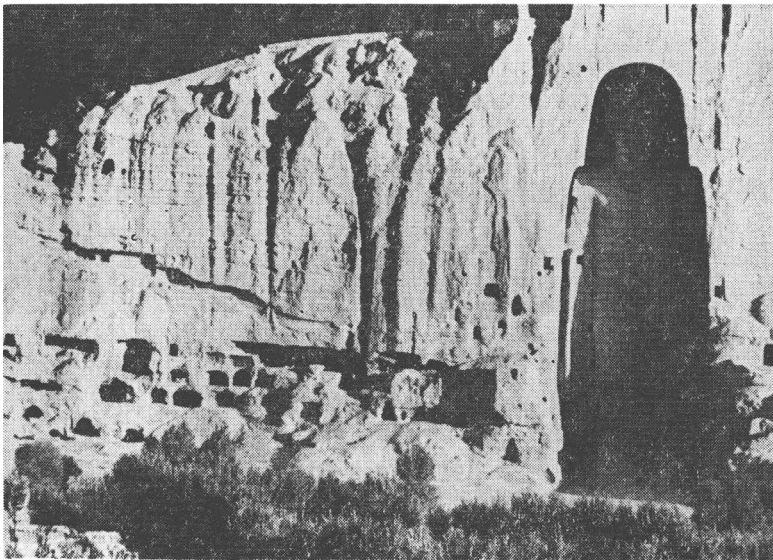
からの日本の唄の母体となっていると云った方が正しいでしょう。唄に限ったことではありません。日本の伝統と言い、そう理解しているながら実はその相当の部分が、むしろ中央アジアを、シルクロードをはるばる越えてきた外来のものであり、自分達の祖先が当時、外来のものとして取り入れて来たものなのだと思った方が間違いない気がします。

短期間ではあれ、シルクロードを旅した時に味わった底知れぬ懐しさといったものが、この物語を書こうと思った動機です。書き始める前に、幾つかのシルクロードに関する本を集めてみました。そしてすぐに、僕などがシルクロードについて語るのは僭越なことだと知らされました。書き始めては仲々筆が進まなくて、とうとう一年以上も過ぎてしまいました。文章を書くことの難しさも充分思い知らされました。唄創りが日常化している故でしょうか、僕にとっては、作詩・作曲の方がよっぽど易しいことのように思われます。にもかかわらず、憶面もなく書き終えてみようと思ったのは、書こうとすることによって自分がますますシルクロードに興味を抱き、横着がらずに先人



達の文章を読み漁ってみようと思えてくること、そして、僕のような者が書いたものでも、読む人にとって、シルクロードに興味を持つことになるきっかけを提供できるのではないかという期待、そんな気持がつきまとったからです。

もうひとつの理由があります。それは僕の世代に対する僕の思い込みです。自分の青春時代を思いおこすと、そこには言葉に上手な先輩世代に対する反抗がありました。文章とか、言葉に対する不信がありました。心の奥の方では畏敬の念を捨て切れずにいながら、言葉以外の表現手段、伝達手段を若者は求めていました。僕は唄という方法を採りましたが、時代は流れて、今青春の真只中にいる人達はその方向を更に押し進め、音や絵や映像、即ち感覚の世代を現出させています。僕の世代を考える時、言葉の世代と感覚の世代との谷間に居る者という気がしてなりません。自分は音に親しんで来たつもりですが、何故か今になって言葉に近づきたくなりました。恐らく自分の役割を自分の前の世代と後の世代の橋渡し、ないしはトランスレーターだと自覚し始めたからなのだと思います。



シルクロードから帰って来て以来、夜寝る前、閉じた眼の暗い管の画面に様々な色彩の映像がとめどなくよぎります。これまでなら、僕はそれを唄にしたかも知れません。ただこの幻想を唄には写し切れないという思いと、言葉、文章を使ってみたいという最近の気持とが重なって、結局不慣れな作業に乗り出すことにしました。従ってこの物語は事実ではありません。事実を大切にしてもいません。自分の経験からして、人間は活字に騙され易いものです。夢々、この物語を事実と誤解されないようにご注意ください。

この物語は、多分に女性が読まれるであろうことを意識して書きなぐったものです。それも、ひとつの期待からです。この本が文化的かどうかはわかりませんが、ひと昔前、明らかに数の上で文化の最大の享受者は学生であり、僕自身、その幸福な一人として学生時代を過ごして来ました。その後、同じような意味でティーンエイジャーにその主流は移り、更に年齢の低い層に移っていったと思っています。狭い意味での文化が、ある意味でその享受者によって支えられるとするならば、享受者こ



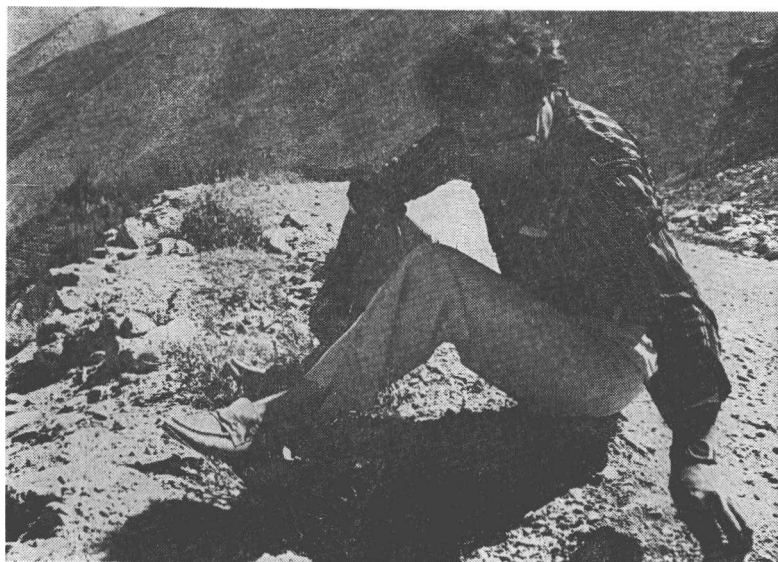
それが時代の文化を決定していくとも言えるでしょう。

僕は、一サラリーマンです。正直なところサラリーマンは自分の間、文化の消費者運動を展開できるようにはなりそうもないと思っています。ローティーン以下に移った主流を引き継げるのは、そして引っ張り上げることが出来るのは、女性ではないかと期待しています。いつか近い将来、僕は僕の配偶者を見て、あまりの羨やましさに焦ることを期待しているのです。

型通りではありますが、この物語を綴るに当って、参考にさせて頂いた先人達の本に感謝します。逐一本の題名を列記する余白のないことを御容赦下さい。また、ややもすると書き続ける作業を放り投げようとする僕を、執拗に叱咤激励して下さい。日本放送出版協会の諸岡氏にこの紙面を借りて脱帽します。それと、この本が見応えのあるものとなっているのは、切り絵作家宮田雅之氏の、素晴らしい切り絵のおかげであることを申し添えておきたいと思っています。

昭和55年 春

小椋 佳



目次

物語を始める前に	3
第一話　ルチーアの夢	11
第二話　五月二十九日の踊り	29
第三話　チグリスの舟橋	45
詩　旅先のためいき	61
第四話　ムサツラーの花園	71
第五話　馨しき矢文	85

第六話	舞い飛ぶ花文様	99
詩	みちすがら	113
第七話	ユルン・カシユの紅絹	121
第八話	火焰清水	137
第九話	西夏の一刃	149
第十話	望郷海路	155
楽譜		170

扉絵 平山郁夫「わが心のシルクロード」より

第一話 ルチーアの夢

アドリアティコ海にこれこそ三月という太陽が登る日を選んで、ルチーアは知り合つて三年のジョヴァンニと結婚しました。

ジョヴァンニは三つ年上、ルチーアにとって三人目の恋人。東方から来る品物を手広くさばいて大金持になった、ヴェネチアで三番目の大商人に仕える奉公人でした。

ルチーアは三という数が好きだったので。気に入らないのは、二十四歳で結婚したことでした。自分では二十三歳の内に、と思つていたのに、彼の商売の仕入れのための航海が長引いて、年を越してしまつたのです。それでも、「二十四は三で割れる数だから」と彼が言つたことと、何より、彼が「今に三つくらいは店をまかされるようになるさ」と言つたことが決め手でした。

妻としての生活が始まつて、ひと月、ふた月は楽しく過ぎました。水路を通り、水門をくぐつて帰つてくる彼を待ちどおしく思い、晩の手料理をひとつひとつ褒めながら食べる彼を嬉しく思い、結婚する前にいちばん嫌なことに思われた、日の出前に起きることも難なくこなせる毎日でした。

三か月目になると、入口の扉飾りから、海を見下ろす窓辺の鉢植から、何から何まで、すっかり彼女の好みに合わせた家の構えも終わりました。彼を送り出して、さあ、何をやろうかしらと思つても、夕げの仕度を考えるぐらいしかやるべきことがなくなつてしまいました。

彼の方は、真面目な勤めぶりが認められて、ますます忙しくなつていくようです。

昔の友達を訪ねたり、家へ呼んだりすることにも飽きてきました。街ではジェノヴァとの戦いが激しくなつてゐるという噂を耳にするのですが、彼女には何の関係もないことのように思えるのです。

そんな或る日。このごろ帰りの遅くなりがちな彼のことを少々うらめしく思いながら、ぼんやり窓の外を見ていると、子供達の唄声が聞こえてきます。

「ケケケチじじい ほら吹きじじい

偏屈じじいの マルコ

退屈すぎて壁をけるより

じじいの話を聞いてあげな

小遣いくれないけれど

話の種なら 千 二千 三千

悪童連が、夕陽の下をゆらゆら揺れながら帰って行きます。

ルチーアは、マルコっていったい誰だろうと思いました。唄の終わりが、三千という数だったことも、彼女を把えた大きな理由だったかも知れません。

疲れ切って帰って来たジョヴァンニが、すぐ眠りにつこうとするのを揺り起して、

「ねエ、マルコってどんな人？」

めんどくさそうに、でも、持ち前の優しさで、

「マルコ？ 誰だい。マルコなんてのは、このヴェネチアに何百人いるかわからないよ」

ルチーアは、さっき聞いたばかりのうろ覚えの子供の唄を繰り返してみました。ジョヴァンニは、

「君の唄は久し振りに聞いたね。でも、それ唄かね」

と答えただけで、どうも知らないようです。

ところが、翌日、早々と帰ってくるなり、

「君の言ってたマルコってのね。あれ、マルコ・ポーロっていう年寄りのことかい。僕のご主人様とは比べものにならない小者だけど、東の物を売って、小銭をため込んでいるらしい。もう峠を越した商人でね、若い頃の自慢話ばかりする人間だそうだ。余り評判もよくないようだよ」

「誰に聞いてきたの？」

「いや、ゆうべ君があんなにせっつくものだから、ちょっと気になってね。商売仲間に聞いてみたんだ。まあそんなことより、今夜のおかずさんは？」

この日、ルチーアは結婚以来初めて夕げの仕度をしていませんでした。彼の帰りが毎日遅かったというより、昨日から今日にかけて、三か月間の生活が何故かしら疎ましく思えてならない憂鬱に囚われて、食事のことなどすっかり忘れていたのです。

当然のように、その夜はジョヴァンニからのなじりがあり、ルチーアはちょっとだけ悲しくなり、次に彼がいい過ぎたと詫び、彼女が自分の方が悪かったというよう一幕がありました。その間もずっと彼女は、決められたとおりを演じる役者のように、うつろなやりとりに感じていました。

へわたしはこうして、気に入った人と一緒に暮らし、おそらく、可愛い子供を産み、幸せな一生を送るんだわ。何の不满もないわ、ない筈だわ」